



【発行】 第70号  
八戸市教育委員会教育指導課  
八戸市内丸一丁目1-1  
43-2111内線457  
平成22年 3月 5日号

# みんなで子どものモデルになりましょう

先日、小林眞八戸市長を会長とする「第2回八戸市青少年問題協議会」が開催され、規範意識を醸成するための「社会モラルの向上」について協議されました。

## 平成22年度 八戸市青少年健全育成の活動提言要綱 活動提言『子どもたちは地域からはぐくむ』という視点による連携強化

### 〔提言内容〕

#### 1 「さわやか 八戸 あいさつ運動」の展開

八戸市内すべての家庭、学校、地域社会、企業、団体等のあらゆる場面で、「さわやかなあいさつ」が充満するよう啓発・参加を呼びかける。また、家庭や学校で最低限のしつけを身に付けさせるための「返事をきちんとする運動」「履き物を揃える運動」や、クリーンなまちづくりを目指した「ゴミ拾い活動」を展開する。

#### 2 青少年の健全育成の基盤となる「地域コミュニティ」の形成

- (1) 「さわやか 八戸 グッジョブ・ウィーク」を展開する。
- (2) 「地域コミュニティ」の形成の一環としての「開かれた」学校づくりを展開する。
- (3) 子どもの安全確保や健全育成のために、地域ぐるみでの取り組みを図る。

#### 3 健全な家庭づくりへの支援

- (1) 「家庭の日」運動等の実践を通して、健全な家庭づくりへの促進を図る。
- (2) 母子保健の機会を利用した学習システムの充実を図る。
- (3) 子育てに関する体験や悩みが共有できる乳幼児をもつ親たちの交流の場の設定を図る。
- (4) 関係機関の広報啓発活動の内容充実と配付対象の拡充を図る。

#### 4 学校外の体験活動の推進

- (1) 青少年団体における活動など学校外活動への参加を奨励する。
- (2) 自然体験活動を推進する。
- (3) 身近な体験活動の場の充実を図る。

#### 5 いじめ問題、薬物乱用問題等、今日的な課題への適切な対応

- (1) いじめ問題の解決に向けた取り組みを図る。
- (2) 薬物乱用問題や喫煙防止、万引き防止等への対応を図る。
- (3) 社会環境改善のための地域ぐるみの取り組みを図る。
- (4) いのちの教育を含めた「生き方に関する指導」の充実を図る。

今回の協議会では、モラロジー研究所の代表から、「社会モラルは、心を込めたあいさつから」「ごみを拾うのは、お世話になった人たちへのお返し」「良いことを意図的にやり、継続し、習慣化すると、人柄となり品性が高まる」などの話題提供がありました。その後の協議では、『子どもは、親、先生、地域の人の3種の大人に出会い、影響を受けて成長する』『八戸市子育て5か条「一日のはじめは笑顔でおはよう」「家庭でしっかり朝ご飯」「子育ては 誉める・叱る・見守る・抱きしめる」「親から実行 社会のルール」「声を掛けよう 地球の未来 子どもたち」に集約されている』などの意見が出されました。一人の大人として、自分の行動が、子どもたちの目にどのように映っているか考えてみませんか。

# 子どもの成長を考える

ある家庭教育研修会で出された質問の中に、次のようなものがありました。

「我が子との向かい合い方がわからない」「話を聞いてあげてと言われるが、子どもが話をしない」「親が子離れできていないって、どういうこと」……。

より便利で、楽ができるサービスに慣れてしまった大人の中には、子どもが望むものをどんどん与えたり、やるべきことを代わりにやってあげたりして、子どもが忍耐や自主性を学ぶことを妨げている方がいます。また、子どもがつまずいたときに、子どもを守ろうとして他者に責任を転嫁し、子どもが反省する機会や成長する機会を奪ってしまう場合があります。それらは、子どもかわいさ故の無意識な過保護行動なのかもしれません。しかし、その後、自分の子育てが不安になると、他者からの指摘やアドバイスに焦り、まだ放せる段階まで育てていないのに、それまでやってあげてきたいくつかのことを突然やめてしまいます。部分的とはいえ、いきなり突き放された子どもは不安定になり、場合によっては、失敗を恐れてやらないことで自己防衛をしたり、気を引くための特異な行動をしたりすることもあります。

本来、子どもを育てるということは、『自分でできるようにする』ことです。そのために、保護者を中心とした周りの大人の距離感や立ち位置が重要となります。そこで、「子育て四訓」（日本時事評論の広報誌掲載）を紹介します。



## 【子育て四訓】

- |                  |                  |
|------------------|------------------|
| 1, 乳児はしっかり肌を離すな  | 2, 幼児は肌を離せ 手を離すな |
| 3, 少年は手を離せ 目を離すな | 4, 青年は目を離せ 心を離すな |

乳児期には、心の安定を保つために、肌を合わせてしっかり抱いてあげましょう。二足歩行ができるまでは、“母親の胸は子宮の延長”であり、しっかりと抱かれることによって赤ちゃんは「守られている」「かわいがられている」と無意識のうちに感じ信頼し安心します。それが、愛情や信頼、情緒的安定、他人を思いやる心など、人間形成の基盤になります。

幼児期には、次第に乳離れをしますが、一気に離すのではなく、常に親がそばにすることで、「心配しなくても良いよ」という安心感を与えることが大切です。周囲のものに関心を持つようになり、自立をさせるための第一段階になります。完全な保護から社会に向けて一歩踏み出す時期といえます。最近では、「子どもの自立」と称して、実際には、親が子育てを放棄する口実に使われている場合もあります。

少年期には、友達との付き合いによって社会性が育つ時なので、しっかり手を離して、活動範囲を広げてやらなければいけません。親をわずらわしく感じる時期でもあるので、反抗したり、非行や問題行動に走ったり、いろんなことで苦しい思いをすることもありますが、成長の過程です。親として逃げずに、子どもに向き合って、共に成長することを心掛けるべきです。子どもの荒れの背景には、親や友人に「こちらを向いて欲しい」というメッセージであることが多いのです。

青年期は、完全に自立していくために、自分なりの生き甲斐を模索し、進路を歩んでいく時ですが、心を離してはいけないということです。親の存在が、何かあったら、いつでも帰れる心のよりどころとして繋がっていることを信じたいものです。

解釈には個人差があると思いますが、年代や子ども状態に応じて、周りの大人でタイミングよく丁寧に接してあげたいものです。子どもは、未来への贈り物なのですから。